

素敵なロマンス / エディ・ヒギンズ

日本で大人気を博しているピアニストのエディ・ヒギンズが、ヴィーナスレコードの看板アーティストらしい壮大なシリーズ企画に挑んだ。ラブ・ソングの名曲を50曲選んで、4枚のアルバムに収録。《ロマンス四部作》と題して、2007年内に順次リリースしていくシリーズである。その50曲はこれまでヒギンズがヴィーナスレコード のアルバムに収録していない曲から選ばれた。唯一、「ある恋の物語」のみプロデューサーの要望により、2度目の録音になったそうだ。レコーディングは2006年8月14～17日にマンハッタンのクリントン・スタジオで行なわれた。4日連続で合計50曲がレコーディングされたわけだ。4枚のアルバムを一気にレコーディングするとは、マイルス・デイビスの“ マラソン・セッション ”を思 い出す。このようなシリーズ企画は当然ながらとても珍しい。アーティストにそれに 適する力量と人気がなければ成立しにくい。その意味でも、ヒギンズならではのシリーズであり、人気も勢いもあるヒギンズの絶好調ぶりを少しでも多く録音記録として残してほしい、そんな思いがかなえられる待望の企画といえよう。

録音メンバーは、エディ・ヒギンズ(ピアノ)、ジェイ・レオンハート(ベース)、マーク・テイラー(ドラム)。ヒギンズのここ数作のドラマーはジョー・アシオーネだったが、このシリーズでは、ドラマーがマーク・テイラーにチェンジした。

エディ・ヒギンズは1932年2月21日マサチューセッツ州ケンブリッジ生まれ。シカゴのノース・ウエスタン音楽院で学んだ。シカゴのヴィー・ジェイ・レーベルで、そして同地の有名なジャズ・クラブ“ ロンドン・ハウス ”でも、ハウス・ピアニストを長年務めた。1970年にフロリダのフォート・ローダーデイルに居を移す。それ以降、冬はフロリダ、夏は故郷から近い避暑地のコッド岬で活動を行なっているそうだ。優雅でマイペースな活動ぶりである。夫人はジャズ・シンガーのメレディス・ダンプロッシオ、夫婦でしばしば共演している。ジェイ・レオンハートは1940年12月6日、メリーランド州ボルチモア生まれ。パークリー音楽院で学ぶ。フリーランスのベースの名手として長年ニューヨークで活躍。作詞家でもある。娘のキャロリン・レンハートはジャズ・シンガー。マーク・テイラーは英国出身で、1962年ロンドンのハムステッド生まれ。独学でジャズ・ドラムを修得。1988年～95年まで、ブリティッシュ・ジャズ・アワード《ベスト・ドラマー》部門でノミネートの常連だった。96年に秋吉敏子〜ルー・タバキン・ジャズ・オーケストラから誘いを受けて、ニューヨークへ進出。それ以来、タバキンのレギュラー・バンドをはじめ、モンティ・アレキサンダー、ケニー・バロン、モーズ・アリソンなどと共演している。

エディ・ヒギンズはピアノ・マスターであり、スタンダード・ソングの達人である。名曲の持つ魅了を最大限に引き出し、エレガントでジェントルにスイングするジャズ・ピアノを聴かせてくれる。多くの人が知っているような名曲を取りあげて、多くの人を魅了するのは簡単なことではない。限られた名手のみが成せる業である。ヒギンズのピアノ・スタイルはそれ自身に魅力があり、そこに名曲の魅力が加味されるわけだから、人気が高いのもうなずける。また、ヒギンズのジャズ・スタイルは原曲のメロディーを大切に、アドリブにおいても原曲のイメージやテイストから大きく離れることがない。原曲のメロディー演奏、メロディアスなアドリブともに素晴らしい魅力があり、エレガントな歌心あふれるピアニストの代表格である。ヒギンズの主な活動の場はジャズ・クラブであり、ナイト・クラブである。そこにはジャズ・ファンだけではなく、ジャズに興味のある一般的なリスナーも多く訪れて来るだろう。レパートリーは広く知られた曲やロマンティックなラブ・ソングなどが自然と増えてくる。ヒギンズはあるときこんなことを書いている。「熟知は受容の要因になる。いい演奏でも、曲を知らなければ受け入れにくい。よくない演奏でも、曲を知ってい

- ## A Fine Romance
- 素敵なロマンス
- ### Eddie Higgins Trio
- エディ・ヒギンズ・トリオ
- あなたに夢中 I Concentrate On You 〈C. Porter〉(4:50)
 - イェスタデイ Yesterdays 〈J. Kern〉(3:46)
 - 素敵なロマンス A Fine Romance 〈J. Kern〉(5:18)
 - ガール・トーク Girl Talk 〈N. Hefti〉(3:30)
 - 九月の雨 September In The Rain 〈H. Warren〉(4:49)
 - アイ・フォール・イン・ラブ・トゥー・イーゼリー I Fall In Love Too Easily 〈J. Styne〉(4:14)
 - ジブシー・イン・マイ・ソウル Gypsy In My Soul 〈C. Boland〉(3:37)
 - ボーン・トゥ・ビー・ブルー Born To Be Blue 〈R. Wells, M. Torme〉(5:35)
 - ヒアズ・ザット・レイニー・デイ Here's That Rainy Day 〈J. V. Heusen〉(3:21)
 - 君にそっくり Exactly Like You 〈J. McHugh〉(4:36)
 - ウィロー・ウィーブ・フォー・ミー Willow Weep For Me 〈A. Ronell〉(6:54)
 - 4月の思い出 I'll Remember April 〈D. Kaye, G. D. Paul, P. Johnston〉(4:23)
 - イン・ラブ・イン・ベイン In Love In Vain 〈J. Kern〉(6:35)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins (piano)**ジェイ・レオンハート** Jay Leonhart (bass)**マーク・テイラー** Mark Taylor (drums)

録音：2006年10月14～17日 ザ・クリントン・スタジオ、ニューヨーク

©© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at Clinton Studio in New York on October 14 17, 2006
Engineered by Troy Halderson
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover：© The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P. Tokyo.
Designed by Taz

れば受け入れやすい」知っている曲ほど、その演奏を好きになりやすいという音楽ファンのある真理をついた言葉である。ヒギンズは長年の音楽活動の中で、そのことを痛感してきたのだろう。アーティストたるものは、リスナーの欲求に応じることも大切である。言い換えれば、ホスピタリティの精神。当たり前のことではあるが、リスナーをもてなすことも芸術性も忘れてはいけない。その意味では、優れた音楽は“もてなしの芸術”ともいえるだろう。この《ロマンス四部作》シリーズも、名曲とジャズを愛するリスナーへ贈るもてなしの芸術作品である。その第1弾が、今、お手にされている『素敵なロマンス』。コール・ポーターに始まり、ジェローム・カーン、ハリー・ウォーレン、ジミー・パン・ヒューゼンなど、おなじみのスタンダードの作曲家たちのラブ・ソングの数々。ヒギンズの最上級のジャズによる“もてなしの芸術”を、とくとお楽しみあれ。

【あなたに夢中】コール・ポーターの代表曲。ミュージカル『ブロードウェイ・メロディー』(1939年)のために作詞作曲。フランク・シナトラ、エラ・フィッツジェラルドなど多数の 名唱名演が残されている。エディ・ヒギンズ・トリオの演奏はボサノバ・タッチのアレンジで、原曲のメロディーを優雅に歌い、美しいアドリブで酔わせる。演奏に合わせて、口ずさみたくなってくるような演奏だ。

【イェスタデイ】ミュージカル『ロバータ』(1933年)中のナンバー。作曲はジェローム・カーン、作詞はオットー・ハーバツハ。ジャズ・スタンダード曲として大人気になった。「煙が目にしみる」も同ミュージカルから生まれた。演奏者によってずいぶん異なる印象を与える曲だ。郷愁や感傷の濃さがさまざまなのだが、ヒギンズの美麗な演奏を聴けば、素晴らしい良き日が甦ってくるようだ。

【素敵なロマンス】フレッド・アステア～ジーンジャー・ロジャース主演の映画『スイング・タイム』(1936年：邦題『有頂天時代』)中の曲で、

ジェローム・カーンが作曲、ドロシー・フィールズが作詞した。ヒギンズ・トリオの間奏のベース・ソロで、ジェイ・レオンハートが演奏しながらハミングしているが、実はジェイは歌もこなせる才人である。

【ガール・トーク】セックス・シンボル、ジーン・ハーローの半生を描いた映画『ハーロウ』(1965年)から生まれたナンバー。女の子同士のおしゃべりの話。ニール・ヘフティの作曲、ボビー・トゥループの作詞。女性シンガーに人気がある。【九月の雨】1937年にハリー・ウォーレンが作曲、アル・デュービンが作詞。2年後、映画『メロディー・フォー・トゥー』に使われて、主演のジェームス・メルトンの歌やガイ・ロンバード楽団などが大ヒットした。ジョージ・シアリング・クインテットがテーマ曲にした。ヒギンズ・トリオは快調でスインギーに乗っている。

【アイ・フォール・イン・ラブ・トゥー・イーゼリー】ミュージカル映画『錨を上げて』(1945年)のためにサミー・カーンが作詞、ジュール・スタインが作曲した片思いのバラード。ヒギンズはあふれるような歌心で本領を発揮。それにしても音色の美しいこと。

【ジブシー・イン・マイ・ソウル】1937年のレビュー『フィフティ・フィフティ』のために、クレイ・ポーランドが作曲、モー・ジャフィが作詞した。アニタ・オデイ、ジューン・クリスティなどシンガーの録音が多い。こういうダンサブルなヒギンズの演奏も楽しい。

【ボーン・トゥ・ビー・ブルー】男性ジャズ・ボーカルの第一人者、メル・トーマと友人のロバート・ウェルズの共 作したブルー・バラードの名曲。出版は1947年。トーマとウェルズは、あのクリスマス の名曲「クリスマス・ソング」の共作者でもある。

【ヒアズ・ザット・レイニー・デイ】ミュージカル『カーニバル・イン・フランダース』(1953年)のためにジミー・パン・ヒューゼンが作曲、ジョニー・バーグが作詞。冷たい雨と過ぎ去った恋のつらい想い出をだぶらせた曲だ。ヒギンズ

は再びボサノバ・タッチのアレンジで、このセンチメンタルなバラードを軽やかなテイストで料理する。

【君にそっくり】「捧ぐるは愛のみ」を生んだジミー・マクヒュー(作曲)、ドロシー・フィールズ(作詞)のコンビによる人気スタンダード・ソング。ミュージカル『リュー・レスリーのインターナショナル・レビュー』(1930年)のために書かれた。同年、ルース・エッティング、ベニー・グッドマンらがヒット。これもヒギンズ・トリオらしいスインギーで愉快的なバージョンだ。

【ウィロー・ウィーブ・フォー・ミー】女性作曲家アン・ロネルが、1932年に作詞作曲した失恋のバラード。「柳よ泣いておくれ」という邦題でも知られる。ロネルはアメリカのポピュラー音楽界で最初に成功した女性作曲家のひとり。この曲はジョージ・ガーシュインへ捧げたといわれる。ここでも、一音一音に思いをこめるようなバラード演奏のお手本といえる演奏が聴ける。

【4月の思い出】コメディ映画『ライド・エム・カウボーイ』(1942年)のためにジーン・デ・ポール、ドン・レイ、パトリシア・ジョンストンが共作。バド・パウエルが名演を残した頃から、モダン・ジャズの人気曲になった。ヒギンズがアドリブでみせるひらめきに満ちた演奏が素晴らしい。

【イン・ラブ・イン・ベイン】ミュージカル映画『センチニアル・サマー』(1946年)のためにジェローム・カーンが作曲、レオ・ロビンが作詞した片思いのラブ・ソング。ヘレン・フォレスト&ディック・ヘイムスのデュオ、マーガレット・ホワイティングの歌がヒットした。アルバムのラストは、きらびやかなスイング感で魅せる演奏で締めくくられる。

(高井信成)